

並行した警告 - 第4号

信仰の礎と忘却の危険：預言と歴史からの教訓

Jeff Pippenger

2023-08-08

彼が誰に知識を教え、誰に教えを理解させるのか. 乳離れした者、乳房から引き離された者たちなのか.

掟に掟を重ね、掟に掟を重ね、規則に規則を重ね、規則に規則を重ね、ここに少し、そこに少し.

というのは、彼は、どもる唇と異なる言葉をもって、この民に語るであろう. 彼らに向かってこう言った、「これこそ、疲れた者を休ませる安息である. これこそ、いいである。」それでも彼らは聞こうとしなかった.

しかし、主の言葉は彼らには、戒めに戒め、戒めに戒め、行に行、行に行、ここに少し、そこに少しとなった. こうして、彼らが出て行って、うしろへ倒れ、打ち砕かれ、わなにかかって、捕らえられるためであった. イザヤ書 28:9-13

イザヤ書のこれらの節は、ハバククの表で繰り返し取り上げられてきた. ここでは、現在の議論に付け加えるために、これらの前の節から一、二の要点にだけ簡単に触れておきたい. この箇所は、彼らが「行き、後ろに倒れ、砕かれ、罾にかかり、捕らえられる」がゆえに、試験に落ちる民を示している. 彼らは、神がだれに「知識を教え」、だれに「教理を理解させよう」とされるのかに関する試験に落ちた民であった. それは、知識の増加を理解することに基づく試験であり、すべての預言者が一致して世の終わりを指し示しているゆえに、ダニエル書十二章で賢い者と悪しき者を分けたのと同じ試験であった. ダニエル書十二章では、「賢い者」は理解するが、「悪しき者」はその知識の増加を理解しない.

イザヤ書の箇所に登場する人々は、彼らが「聞こうとしなかった」『主のことば』によって試験された. そして、彼らが拒み、「知識」の増大を「悟る」ことを可能にしたはずの、その特定の『主のことば』とは、預言の歴史を正しく整列させる方法を定義する聖書の規則であった. イザヤ書の箇所で倒れる者たちは、預言の歴史を理解するためには「ここに少し、あそこに少し」とその筋道を探し求めなければならないことを示す規則を退けた. 彼らが拒んだ試験をもたらした『主のことば』とは、あちらこちらから預言の筋道を選び取り、そのうちの一つを、同じ主題を扱う他の預言の歴史の筋道と並行に配置するという技法であった. このようにして筋道に筋道を重ねていく企ての成否は、真正な預言解釈の規則の適用にかかっている. それらの規則は、また集め合わされるべき「おきて」でもあり、聖書のあちこちに見いだされる. イザヤの乙女たちがこの試験に落ちるのは、彼女たちが、決して忘れてはならなかった最も重要なこと、すなわち歴史は繰り返すということを忘れるからである.

将来を恐れる理由は何もない. ただし、主がこれまで私たちを導いてこられた道と、過去の歴史における主の教えを忘れてしまうときは別である. 『Life

神は混乱の神ではない。そしてそのことのできる確かな拠り所は、聖書のすべての預言者が同じ預言の筋道を指し示しているという点にある。彼らとその筋道上で見ている出来事は必ずしも同一ではないが、世の終わりにおける出来事の筋はいつも同じである。それは、恵みの時の終わりへと至り、その後最後の七つの災いが続き、そしてキリストの再臨で締めくくられる一連の出来事である。ある預言者の物語は、その歴史の筋における神に忠実な民についてであるかもしれないが、別の預言者の証言は、神に不忠実な民、あるいはアメリカ合衆国、バチカン、国際連合、地の商人、あるいはイスラムについてであるかもしれない。しかし、それでも常に同じ筋道なのである。

マラキ書のエリヤのメッセージ、ならびに黙示録1章・14章・18章に表されているメッセージ、そしてダニエル書11章と12章のメッセージは、いずれもまったく同じメッセージである。これらはすべて同じ歴史の流れに属しているが、それぞれが物語に独自の特別な貢献をしている。

その特別なメッセージについてほぼ例外なく誤解されているのは、それが人類の猶予期間の終わりの直前にのみ神の民に明らかにされるという事実である。特別なメッセージが常に、間もなく訪れる猶予期間の終わりを警告していることを踏まえ、私たちは聖書における猶予期間の終わりの、おそらく最も明確な例を考察することにする。

不義を行う者は、なおも不義を行え。汚れた者は、なおも汚れたままでいよ。正しい者は、なおも正しくあれ。聖なる者は、なおも聖くあれ。ヨハネの黙示録 22:11

天の聖所で第十一節の言葉をもって恩恵期間の終わりが宣言される前に、黙示録からの特別な警告の預言的メッセージが、神のしもべたちに対して封印が解かれて明らかにされる。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

最後の七つの災いの直前には、神の民によって認められる特別な預言的メッセージが告げられる。その「時が近い」とき、封印されていた「この書の預言」（黙示録の預言）は解かれる。黙示録の中で封印されている唯一の預言は、七つの雷の預言である。

また、私は、雲を身にまとった別の力ある御使いが天から下って来るのを見た。その頭の上には虹があり、その顔は太陽のようで、その足は火の柱のようであった。彼の手には開かれた小さな巻物があり、彼は右の足を海に、左の足を地に置いた。そして彼は獅子がほえるような大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷が声を発した。七つの雷が声を発し終えたとき、私は書き留めようとしたが、天から声がして私に言った。「七つの雷が語ったことを封じて、書き記してはならない。」黙示録 10:1-4。

人類の恩恵期間が閉じられる直前、「時は近い」と言われるとき、「間もなく起こるべきこと」を明らかにする特別な聖書の真理の封印が解かれるだろう。黙示録10章の力強い御使いは、獅子のように叫んだイエス・キリストである。

「ヨハネに指示を与えた力ある天使は、ほかならぬイエス・キリストであった。右の足を海に、左の足を陸に置いておられるお姿は、サタンとの大いなる争いの終幕において彼が果たしておられる役割を示している。この姿勢は、全地に対する彼の至高の力と権威を示している。この争いは時代を重ねるごとにいよいよ激しく、より断固たるものとなり、暗黒の勢力の巧妙な働きが極みに達する終結の場面に至るまで続くであろう。サタンは邪悪な人々と結託して、真理を愛する心を持たない全世界と教会を欺く。しかし、この力ある天使は注目を喚起する。彼は大声で叫ぶ。彼は、真理に反対するためにサタンと結びついた者たちに、その声の力と権威を示すのである。」
セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971。

最後には、「サタン」が惑わす「諸教会」は、「真理」を愛する心を受け入れなかったために惑わされる。ホワイト姉妹が先ほど言及したテサロニケ人への第二の手紙の箇所にある「真理」という語は、三つのヘブライ文字から成り「真理」と訳され、アルファとオメガを表すヘブライ語の語に由来する主要なギリシア語の語である。キリストの品性の属性を表す初出の法則に結び付けられたその真理こそが、退けられ、その結果として強い惑わしを生じさせる真理であることを示す聖書的証拠はあるだろうか。

さて、兄弟たちよ、私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが彼のもとに集められることについて、あなたがたにお願いします。すなわち、心をたやすく動かされたり、うろたえたりしないように。霊によっても、言葉によっても、あるいは私たちからのもののような手紙によっても、「キリストの日が差し迫っている」かのようにしてはならない。どのような手段によっても、だれにも惑わされてはなりません。まず離反が起り、不法の人、滅びの子が現れないかぎり、その日は来ないからです。彼は、神と呼ばれるもの、礼拝されるもののすべてに反抗し、自らをそれらの上に高め、神であるかのように神の神殿に座して、自分こそ神であると示します。私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話したのを覚えていないのですか。今、彼が自分の時に現れるために何がそれを抑えているのか、あなたがたは知っています。不法の秘義はすでに働いています。ただ、今それを押さえ止めている者が、取り除かれる時までそうしているだけです。そしてその時、不法の者が現れます。主はその口息をもって彼を滅ぼし、その来臨の輝きによって彼を打ち滅ぼします。彼の来臨は、あらゆる力としるしと偽りの不思議を伴うサタンの働きに従って現れ、滅びつつある者たちに対して、不義のあらゆる欺きとともに来ます。彼らは救われるための真理への愛を受け入れなかったからです。ゆえに、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされます。それは、真理を信じず、不義を喜んだすべての者が裁かれるためです。テサロニケ人への第二の手紙 2:1-12。

テサロニケ人への手紙のこの箇所は、ハバククの表でたびたび取り上げられてきたので、ここでは簡単なコメントにとどめます。ホワイト姉妹が「サタンの驚くべき業」と呼ぶものは、パウロの言う「あらゆる力としるしと偽りの不思議をもってなされるサタンの働き」のことです。ホワイト姉妹とパウロが指摘するこの欺きの働きは、アメリカ合衆国における日曜法の時に始まります。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の

連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

私たちが考察しているテサロニケ人への手紙のこの箇所で、パウロは世の終わりに現れる教皇を四つの異なる語で指し示している。教皇は「罪の人」であり、「滅びの子」であり、「不法の奥義」であり、「あの邪悪な者」である。パウロは、これら四つの名以外にも教皇のいくつかの特徴を示しており、（パウロの時代にはまだ将来の人物であった）教皇が「その時に現れる」と私たちに知らせている。

教皇は「その時に明らかにされる」。そして、ローマ教会の教皇が聖書の預言における反キリストであるという最も明白な聖書的証拠（ただし、それだけが唯一の聖書的真理というわけではない）は、教皇制が地上を支配する「時」を特定する、聖書中の七つの異なる直接的言及によって確立されている。その「時」とは、人類が暗黒時代と呼ぶまさにその期間である。聖書は、教皇制が世界を支配する正確な「時」、すなわち538年から1798年までの期間を繰り返し示すことによって、教皇を教皇制として明らかにしている。パウロは、彼が自分の時に明らかにされると言った。

パウロはまた、次のように述べ、そうした者が教皇であることを特定している。「彼は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、それらの上に自らを高く掲げ、神であるかのように神の神殿に座して、自分こそ神であることを示す。」このことは、ほかの点とともに、聖書の預言における反キリストが宗教的な象徴であることを示している。彼はヒトラーでも、アレクサンドロス大王でもない。これは教皇の特定をさらに絞り込む。彼は単なる宗教的暴君ではなく、神の神殿の内にと称する宗教的暴君なのである。反キリストは、自分がキリスト教会の内部に座していると主張する。

パウロとダニエルによれば、教皇が自らキリスト教であると称する教会にいるとき、彼は、神の御座に就き、すべてのものの上に高められることを望んだサタンの性質を現す。私がパウロとダニエルの名を挙げるのは、多くの聖書注解者がこう認めているからである。すなわち、パウロが教皇の特徴の一つとして彼が徹底した自己愛者であることを示すとき、パウロは単に、ダニエル書11章におけるダニエルによる教皇の描写を引用しているにすぎないということである。そこにはダニエルが次のように記している：

王は自分の思うがままに行い、自らを高くし、すべての神々にまさって自分を大いなる者とし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成し遂げられる時まで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

パウロは教皇の自己愛的な性質に言及するとき、ダニエル書の一節を言い換え、「神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、自らをそれらすべての上に高く掲げ、神であるかのように神の宮に座し、自分が神であることを示すのは教皇である」と述べる。教皇制の性格を示すそのダニエル書の一節はまた、教皇制が反キリストであることを「明らかにする」ために定められた「時」にも言及しており、彼は教皇制が「憤りが成就する」まで「栄える」と述べている。

「憤り」は1798年に終わった。したがって、その節でダニエルは（これは、ダニエル書と黙示録において1260年の歴史が言及されている七つの直接的な箇所の一つではないが）、教皇権を直接に特定し、1798年にそれがヨハネの呼ぶところの「致命的な傷」を受けたことを示している。ゆえに、その節は支配の期間の長さを明らかに示していないものの、教皇の支配の時代の終わりを示している。

この箇所でパウロは、手紙の宛先であるテサロニケの人々がすでにこの特定の真理を知っていると述べつつ、538年に教皇権が世界の支配を掌握することを抑える力も指摘している。彼は「私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話したのを、覚えていないのですか」と問いかけた。彼は、彼らがすでに、彼が「定められた時に現れる」まで教皇権を「抑えているもの」（すなわち抑制するもの）を知っているのだと彼らに思い起こさせた。教皇権が世界の支配を掌握するのに先立ってそれを妨げていた力とは、パウロがこの手紙を書いた当時、世界を支配していた力であった。それは異教ローマである。教皇権が世界の支配を掌握するためには、異教ローマが「取り除かれる」ことになるとパウロは記した。

この理解こそが、ウィリアム・ミラーに、ダニエル書で「the daily」として象徴されている権力が異教ローマであると認識させたのである。アドベンティズムは、ウィリアム・ミラーの預言理解の体系、したがって彼のすべての預言的理解がダニエル書と黙示録の理解に基づいており、しかもその二つの書が異教ローマと教皇ローマという二つの荒廃をもたらす権力を扱っていることを認めている。ミラーはテサロニケ書の一節において、（当時のすべてのプロテスタントがそうであったように、教皇が反キリストであることを）すでに知っていた。彼が、教皇支配に先行した歴史的権力が異教ローマであり、教皇制が地上の王座に上る以前に異教ローマが取り去られるとパウロが述べていることを認めるとき、彼はこれをダニエル書と「the daily」と結び付けた。そこでは、「the daily」が教皇制が世界を掌握する前に「取り去られ」なければならぬと三度言及されているからである。パウロの証言によって、ミラーはダニエル書の「the daily」が異教ローマであることを見抜き、その後、ダニエル書の二つの荒廃をもたらす権力が異教ローマと教皇ローマであることを認識できた。この真理はミラー派運動の土台をなすものである。今日、アドベンティズムは確かにミラーの業績を退けているが、それでも、ダニエル書の「the daily」に関するミラーの理解の展開をたどるこの概観が、パウロが「抑えている」と述べた、取り除かれるまで教皇権の台頭を押しとどめていた権力が異教ローマであったことを示しており、これがこれらの主題に関するミラーの思考の正しい分析であると理解している。

ダニエル書における「the daily」が、ダニエルが「荒廃をもたらす憎むべきもの」として表した教皇ローマの王国に先立つ異教ローマを象徴しているという真理を理解することで、ミラーは聖書の預言における諸王国に関連づけられた預言期間を見抜けるようになり、こうした洞察に彼の理解が開かれていくにつれて、アドベンティズムの土台をなす一連の真理をまとめ上げた。これらの真理は、1843年と1850年のパイオニア図表という二つの板に刻み込まれた。これらの真理はアドベンティズムの基礎であり、それらは「時」の認識に基づいていた。土台がいつ据えられたのかという歴史は、ハバククスの板に関する主要な論点である。

ハバククの表で指摘されていないのは、時に基づく土台が、土台として表されていた諸真理が存在したことを最後の世代が認識するために必要な視点を与える構造を生み出していた、という点である。土台に最初に据えられた最初の石となる第一の真理があったが、ダニエル書の「日ごとのささげ物」はミラーの第一の真理ではなかった。ミラーが築くように起こされた土台の最初の石となる真理は、レビ記二十六章の「七つの時」であった。しかし「日ごとのささげ物」の真理がなければ、第一の天使のメッセージを提示するために彼が認識すべき預言の構造を、ミラーは認識できなかったであろう。彼の構造とは、二つの荒廃させる勢力という観点から預言を位置づけることだった。ミラーは竜（異教ローマ）と獣（教皇制）を取り上げていた。第三の天使は竜（国際連合）、獣（教皇制）、そして偽預言者（アメリカ合衆国）を取り上げる。

もしある人が、いくつかではなく、すべて、ミラー派が二枚の神聖なパイオニア図表に示した時の預言を受け入れるなら、その人はそれらの真理を自ら調べる必要がある。調べたこともないのに、どうしてそれらを受け入れられるだろうか。基礎的な真理を調べる人々が、その真理を自分の責任として吟味し、その後それらすべての真理を受け入れるなら、彼らは砂ではなく岩の上に築いたのである。

シオンの城壁の上で神の見張り人として立つ者たちは、民の前にある危険を見通すことのできる人々、真理と誤り、義と不義を見分けることのできる人々であれ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

ミラー派の歴史における時の預言を聞こうとする者たちがそれを分析するためには、時の預言によって示されている歴史的期間に目を向けるという行為が必要である。これは、出来事を時間軸上に図示する作業を意味する。ミラー派が聖書から見出し、その後歴史記録によって裏づけたこれらの預言期間を検討する段階に、預言を学ぶ者が到達したとき、彼は、時の預言の初めにある歴史が、その同じ預言の終わりにある歴史を象徴的に予型していることを認識できる立場に至るだろう。その見地に立てば、その学徒は歴史が繰り返されることを学ぶはずである。その理解を踏まえて、彼はまた、イエスが初めをもって終わりを示されることを見るはずである。

世の終わりを「神殿の建設」として描く預言の筋道において、学ぶ者は、土台の上に建てられる神殿には最後に据えられる頂石があることを知るべきである。学ぶ者は、ミラーが用いられて明るみに出された神殿の土台（それはイエス・キリストを表している。というのも、イエス・キリスト以外に据えることのできる土台はないからである）が、預言の時に基づいて築かれた土台であったことを理解するようになるべきである。イエスは初めをもって終わりを示されるので、学ぶ者はまた、神殿の最後の石である頂石が土台に対応するものでなければならないことも理解すべきである。ミラーにとって神殿の土台は

預言の時であったが、それでもなお、その土台はイエス・キリストであった。

私に与えられた神の恵みによって、知恵ある建築家として、私は土台を据え、別の者がその上に建てている。しかし、各人はどのようにその上に建てるかに注意なさい。というのは、すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、だれも別の土台を据えることはできないからである。第一コリント 3:10、11。

パウロは、自分の働きを、自らが土台、すなわち始まりを据えた神殿を建てることとして捉えています。彼は異邦人への使徒であり、キリスト教会の土台を据えるために用いられました。同じ箇所、パウロは私たちの体が聖霊の宮であることも示しています。また、ソロモンの神殿や荒野の幕屋もあり、いずれもその土台はイエス・キリストを表しています。ミラーはアドベンチズムの神殿の土台を築くために用いられました。その神殿の土台は確かにイエス・キリストですが、より具体的には、霊的かつ預言的な資材によって築かれる神殿です。

ゆえに、頭石もまたイエス・キリストでなければならない。しかし、頭石には第一の預言的規則も含まれていなければならない。というのも、ミラーには一連の規則が与えられており、その中にはミラー派の第一の規則、すなわち「一日一年」の原則が含まれていたからである。その規則がなければ、時の預言は認識されず、したがって土台もない。終わりの時には、イエス・キリスト（すなわち土台）を表す対応物がなければならない。それは、イエス・キリストの啓示を確立する一連の規則の中にある第一の規則である。その規則とはもちろん「最初の言及」の規則であり、始めから終わりを告げるキリストの品性の属性を表している。

テサロニケ人への第二の手紙において、救われるために真理への愛を受け入れなかった者たちは、旧約聖書で「真理」と訳される三文字から成るヘブライ語から派生したギリシャ語によって表される真理を拒んだ。偽りを信じたがゆえに強い惑わしを受けるその一団は、二つの聖なる図表に示されているアドベンチズムの基礎、すなわちいにしへの道に立ち返ることを拒んだ。それで、私たちがしばらくの間考察してきたこの箇所は次のように述べている：

「ヨハネに指示を与えた力ある天使は、ほかならぬイエス・キリストであった。右の足を海に、左の足を陸に置いておられるお姿は、サタンとの大いなる争いの終幕において彼が果たしておられる役割を示している。この姿勢は、全地に対する彼の至高の力と権威を示している。この争いは時代を重ねるごとにいよいよ激しく、より断固たるものとなり、暗黒の勢力の巧妙な働きが極みに達する終結の場面に至るまで続くであろう。サタンは邪悪な人々と結託して、真理を愛する心を持たない全世界と教会を欺く。しかし、この力ある天使は注目を喚起する。彼は大声で叫ぶ。彼は、真理に反対するためにサタンと結びついた者たちに、その声の力と権威を示すのである。」
セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971。

先の箇所では「真理への愛を受けなかった諸教会」は、アモス8章12節が手遅れになってから神の最後の警告のメッセージを探し始めると示している、ダニエルとマタイの邪悪で愚かな乙女たちである。手遅れなのは、彼らがアドベンチズムの土台に関する偽りを信じたからである。アドベンチズムは1863年に初めてその偽りを取り入れ始め、そこから先

はひたすら下り坂だった。

これから書くことはまったく主観的なものだと思いますが、1863年以降、アドベンチズムにもたらされた新しい預言的な光とは何だったのでしょうか。エレン・ホワイトは、ジョーンズとワゴナーの1888年のメッセージについて、それは彼女が何年も前から語ってきたメッセージだと言っています。彼らのメッセージは1888年のアドベンチズムには新しく衝撃的に聞こえたかもしれませんが、その新しさや衝撃を生み出したのは新しいメッセージではなく、1863年以降、神の民を覆ってきた盲目さだったのです。

エレン・ホワイトは、1863年以前にアドベンチズムがラオデキヤの状態にあると指摘した。したがって、ラオデキヤの盲目さは1863年以前からすでにアドベンチズムに忍び寄っていた。しかし1863年に、教会はレビ記26章の「七つの時」に関する真理を公式に退けた。これは、ミラーが見いだした最初の「時の預言」だった。1863年以降、アドベンチズムにおいて現れた預言的な光は一つもない！何が変わったのか？

預言の時に基づいて築かれ、イエス・キリストを表していた神殿の土台の最初の石は、1863年にアドベンチズムによって退けられた。ミラーが神殿の土台に据えた最初の石、すなわち、キリストが自らを「驚くべき数を数える者」パルモニとして表し、ダニエル書において示された時に基づくものは、拒絶され、退けられた。ミラーが見いだしたまさに最初の石は…

「退けられた石」の預言を引用されたとき、キリストはイスラエルの歴史における実際の出来事に言及した。その出来事は第一神殿の建設と関係していた。それはキリストの初臨の時代に特別な適用があり、ユダヤ人の心にとりわけ強く訴えかけるものであったが、私たちにも教訓を与えている。ソロモンの神殿が建てられたとき、壁と基礎に用いる巨大な石はすべて採石場で完全に加工され、建築の現場に運ばれた後は一切の道具をそれに当ててはならなかった。職人たちはただ所定の位置に据えるだけでよかった。基礎に用いるため、ひとつの並外れて大きく特異な形の石が運ばれてきたが、職人たちはそれはめ込む場所を見つけられず、受け入れようとしなかった。使われずに彼らの作業の邪魔になるだけの厄介者であった。その石は長い間、退けられた石のままであった。ところが建築者たちが隅石を据える段になったとき、その特別な場所を占め、そこにかかる大きな重みを支え得る、十分な大きさと強度、そして適切な形をもつ石を見つけるために、長いこと探し回った。この重要な箇所に不適切な石を選べば、建物全体の安全が危うくなるからである。彼らは、日射や霜、暴風雨の影響に耐えうる石を見つけなければならなかった。何度か数個の石が選ばれたが、巨大な荷重のもとで粉々に砕けてしまった。ほかの石は、急激な大気の変化という試練に耐えられなかった。だがついに、長い間退けられていたあの石に注意が向けられた。それは空気にさらされ、日光や嵐にもさらされてきたが、ほんのわずかなひびさえ見せなかった。建築者たちはこの石を調べた。それはただ一つを除いて、あらゆる試験に耐えていた。厳しい圧力の試験に耐えられるなら、隅石として採用しよう、と彼らは決めた。試験は行われた。その石は合格とされ、所定の位置に運ばれ、寸分の狂いもなく適合することがわかった。預言的な幻の中で、イザヤはこの石がキリストの象徴であることを示された。彼はこう言っている。

「万軍の主ご自身を聖とせよ。彼をあなたがたの恐れとし、彼をあなたがたのおののきとせよ。彼はあなたがたには聖所となられる。しかし、イスラエルの両家にはつまずきの石、つまずかせる岩となり、エルサレムの住民には網とも罾ともなる。彼らのうち多くの者がつまずき、倒れ、砕かれ、罾にかかって捕らえられる。」 預言的な幻のうち初臨へと導かれ、預言者は、ソロモンの神殿の隅のかしら石の取り扱いが象徴していた試練と試みを、キリストが担われることを示された。「それゆえ、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはシオンに、基のために一つの石、試みを経た石、尊い隅のかしら石、確かな礎を据える。信じる者は慌てることがない。」 イザヤ書 8:13-15; 28:16.

無限の知恵をもって、神は礎石をお選びになり、ご自身でそれを据えられた。神はそれを「確かな礎」と呼ばれた。全世界の人々はその上に自らの重荷と悲しみを置くことができる。それはそれらすべてに耐えうる。完全な安全のうちに、その上に建て上げることができる。キリストは「試みの石」である。彼に信頼する者を、彼は決して失望させない。彼はあらゆる試練に耐え抜かれた。彼はアダムの罪責の重圧と、その子孫の罪責の重圧に耐え、悪の力に対して勝ち得て余りある勝利を収めた。彼は、悔い改めるすべての罪人が彼の上に負わせた重荷を担われた。キリストにあって、罪の責めを負う心は安らぎを見いだした。彼こそ確かな礎である。彼を頼みとするすべての者は、完全な安全のうちに憩う。

イザヤの預言において、キリストは確かな礎であると同時に、つまずきの石であると宣言されている。使徒ペテロは、聖霊の靈感によって書き記し、キリストが誰にとっても礎石であり、誰にとってもつまずきの岩であるのかを明確に示している：

「もしあなたがたが主の恵み深さを味わい知ったのであれば、人々には確かに捨てられたが、神に選ばれ尊ばれた生ける石であるこの方のもとに来て、あなたがた自身も生ける石として、霊的な家に築き上げられ、聖なる祭司とされ、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげる者とされるのです。それゆえ、聖書にもこう書いてあります。『見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い隅のかしら石を据える。彼を信じる者は決して恥を見ることがない。』このように、信じるあなたがたにはこの方は尊いのです。しかし、不従順な者たちにとっては、『家を建てる者たちの捨てた石、それが隅のかしら石となった』のであり、また『つまずきの石、さまたげの岩』です。彼らは御言葉に従わないので、つまずくのです。」 第一ペテロ 2:3-8.

信じる者にとって、キリストは確かな礎である。彼らは、岩なるキリストの上に倒れて砕かれる者たちである。ここに示されているのは、キリストへの服従とキリストへの信仰である。岩なるキリストの上に倒れて砕かれるとは、自分の義を捨て、子どものようなへりくだりをもってキリストのもとに行き、私たちの背きの罪を悔い改め、キリストの赦しの愛を信じることである。そして同様に、信仰と従順によって、私たちはキリストを土台として築き上げるのである。

この生ける石の上に、ユダヤ人も異邦人も等しく建て上げることができる。これは、私たちが堅固に建てることのできる唯一の土台である。それはすべての人にとって十分に広く、世界全体の重みと重荷に耐えうるほどに強い。そして、生ける石であるキリストとの結びつきによって、この土台の上に建てるすべての者は生ける石となる。

多く人は自らの努力によって切り出され、磨かれ、美しく整えられている。しかし、キリストにつながっていないので、「生ける石」にはなりえない。このつながりなしには、だれも救われない。キリストのいのちが私たちのうちになければ、誘惑の嵐に耐えられない。私たちの永遠の安全は、確かな土台の上に建てることにかかっている。今日、多くの人々が、試されたことのない土台の上に建っている。雨が降り、嵐が荒れ狂い、洪水が押し寄せると、彼らの家は倒れる。なぜなら、それは永遠の岩、隅のかしら石であるキリスト・イエスの上に据えられていないからである。

「『御言葉につまずき、不従順である者たちにとって』、キリストは『妨げの岩』である。しかし『建てる者たちが退けた石が、隅のかしら石とされた』。退けられた石のように、キリストは地上での務めにおいて、冷遇と虐待に耐えてこられた。彼は『人に侮られ、のけ者にされ、悲しみの人で、悲しみに通じていた。…彼は侮られ、私たちは彼を尊ばなかった。』イザヤ書 53:3。だが、彼が栄光を受ける時は近づいていた。死者の中からの復活によって、彼は『力ある神の子』であると宣言されるだろう。ローマ人への手紙 1:4。彼の再臨のとき、彼は天と地の主として現される。今まさに彼を十字架につけようとしている者たちは、彼の偉大さを認めることになる。全宇宙の前で、退けられた石は隅のかしら石となる。」

そして、「それが誰の上に落ちかかっても、その人を粉みじんに打ち砕く」。キリストを拒んだ人々は、まもなく自分たちの都と国が滅ぼされるのを見ることになった。彼らの栄光は打ち砕かれ、風の前の塵のように散らされた。では、ユダヤ人を滅ぼしたのは何であったのか。それは、もしその上に建てていたなら彼らの安全の拠り所となったはずの岩であった。すなわち、蔑まれた神の慈しみ、退けられた義、軽んじられた憐れみであった。人は神に逆らう道を選び、本来なら彼らの救いとなるはずのすべてが、彼らの滅びへと変えられた。命のために神が定めたすべては、彼らには死となった。ユダヤ人がキリストを十字架につけたことのうちに、エルサレムの滅亡がすでにほられていた。カルバリーで流された血は、彼らをこの世においても来るべき世においても滅びへと沈める重しであった。同様に、神の恵みを拒む者たちの上に裁きが下る大いなる終わりの日にも、そうなる。彼らのつまずきの石であるキリストは、そのとき彼らには報復の山として現れる。義人には命であるその御顔の輝きが、悪しき者には焼き尽くす火となる。退けられた愛、軽んじられた恵みのゆえに、罪人は滅びる。

イエスは多くのたとえと度重なる警告によって、神の子を退けるならユダヤ人にどのような結果が及ぶかを示された。これらの言葉において、彼は自らを贖い主として受け入れることを拒む、あらゆる時代のすべての人々に語りかけておられた。すべての警告は彼らのためである。冒瀆された神殿、不従順な息子、悪い小作人たち、悔った建築者たちは、すべての罪人の経験の中にそれに当たるものをもっている。悔い改めないなら、彼らが予示した滅びがその身に降りかかる。 Desire of Ages, 597-600.

続きは次回の記事で。